

企業名： 株式会社サイバーエージェント

レポート名： 統合報告書「CyberAgent Way 2022」

1. この会社が目指している将来の姿が理解できるか

株式会社サイバーエージェント（以下、サイバーエージェント）は、「新しい力とインターネットで日本の閉塞感を打破する」ことを大きく掲げ、テクノロジーとクリエイティブによって21世紀を代表するグローバルカンパニーを目指す。代表取締役藤田晋氏による文章内においては、世界に誇れる日本企業を創ろうという理念に基づき社員の能力を最大限引き出し伸ばす会社を目指していることが述べられている。また、そのような会社にするために、今日の変化の激しい世の中でサイバーエージェントの強みを活かして社会的価値創造を行うことが述べられており、将来の姿がある程度理解できる。

しかし、期待をかけ意図的に優秀な人材を抜擢することで成長を促すなど人材面の取り組みが詳細に説明されている一方で、サイバーエージェントの社会的役割についての記述は少なく、今後どのように社会に貢献し社会の一員として外部とつながりをもっていかは統合報告書からは理解しにくい。

2. この会社の現在の競争優位性が理解できるか

サイバーエージェントは自社の強みを「技術力」「創出力」「人材力」にあるとする。人材力に関しては特集が生まれ、「採用・育成・活性化・適材適所」を軸に注力していることが明記されており、常務執行役員 CHO 曾山氏へのインタビューも掲載されている。さらにそれぞれの項目におけるサイバーエージェントのこれまでのプロジェクトと実績が記載されており、特に働きやすさや労働条件の面でサイバーエージェントの長期的な成長が確認できる。一方で技術力と創出力についての特集はない。技術力については「高い」と表現されているのみで、具体的な技術についての記載がない。また、創出力についてはこれら上記の3つのキーワードが並ぶ場面用いられているのみであり、説明不足である。このように統合報告書内で「技術力」と「創出力」という言葉は何度も使用されるが、どちらも詳細は明示されていない。「CyberAgent Way 2021」では反対に、これら2つの強みの紹介に焦点を置き人材力についての記述が少ない。よって自社の強みは理解しにくい。

しかし、創業以来25期連続増収を達成しており、Thundermark Capital が選ぶAI研究をリードするトップ100企業や deta.ai Inc.によるトップパブリッシャーアワード2022にランクインしていることが記載されている。高いAIテクノロジーや組織力・変化への対応力により、インターネット広告事業では国内有数の規模を、スマートフォンゲーム事業でも国内トップシェアを誇り、企業の競合力が優れていることが読み取れる。

3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか

メディア「ABEMA」を長期的に中心事業にするための投資を行っていることが記載されており、サービスの利便性向上や対応デバイスの拡充などに努めている。また、「ABEMA」は機能の変更・追加が比較的容易に行えるため社会の変化に対応可能であるため、持続的な成長の可能性がある。サイバーエージェントではこの事業を基に、周辺事業への展開も行っている。競輪・オートレースのインターネット投票サービス「WINTICKET」が市場シェア3割を獲得したという例をあげており、サイバーエージェントが培ってきた開発のノウハウや技術を活かして新たな価値創造が行われていることがわかり、今後もそのように新たな事業展開により優位性を持続できると考えられる。

4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

サイバーエージェントでは社内移動公募制度や社内求人サイトが運用されているとあり、さらに、これら制度の利用による成果も出ており、自分の新たな才能を発見するなど人的資本の価値上昇が見込める。また同社は主体性を重んじており、チーム全体で組織ごとの目標を定めながらそれに応じて自主的な挑戦を行うことができる。さらに「リスキングセンター」では知識や技術の提供なども行われており、直接的に人的資本の蓄積に役立つと考えられる。

また女性社員が活躍できる環境づくりとして、ライフイベント支援や本人のキャリア志向に沿ったポジション提供を行っていることや女性横断組織「CAramel」が女性活躍の推進を行っていることが述べられている。したがって働きやすい職場で長期的に自身の能力を伸ばすことが可能であると考えられる。

5. 報告書のよかった点はどこか、どのような改善余地があるか

図や写真が多く用いられており、内容の理解が容易である。特に社内の風景や従業員を写した写真も多く、会社の雰囲気が想像しやすい。しかしデザイン性が重視され統合報告書全体に統一感がある一方で、それが読みづらくする要因にもなっている。スタイリッシュな図やグラフが前面に押し出された配置によって、全体的に見出し以外の文章の文字が小さくなっているためである。また写真だけのページが多くページ間の移動に手間がかかる。

また、先に述べたように「CyberAgent Way 2022」では技術力と創出力に関する記述が少なく、「CyberAgent Way 2021」では人材力に関する記述が少ない。しかしサイバーエージェントの統合報告書は、事業紹介をはじめとして2021年度と2022年度には重複する点も多いことから、複数年度分読むことを前提としているとは考えにくい。したがって同社は強みなどの企業を広告するために大事な情報は毎年統合報告書に掲載するべきである。

参考文献

CyberAgent Way 2022 (統合報告書)

https://d2utiq8et4vl56.cloudfront.net/files/user/pdf/ir/library/annual/cyberagent_IR_2022_jpn.pdf?v=1681358549 (最終閲覧日：2023年7月28日)

CyberAgent Way 2021 統合報告書

https://d2utiq8et4vl56.cloudfront.net/files/user/pdf/ir/library/annual/cyberagent_IR_2021_jpn.pdf?v=1642395115 (最終閲覧日：2023年7月28日)